この学園は少しおかしい！

春夏秋冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この学園は少しおかしい！

【Ｎコード】
Ｎ６７３９Ｙ

【作者名】
春夏秋冬

【あらすじ】
掴めポイント！！目指せ高級クラス！！勉強も才能もない少年、佐藤和樹が繰り広げる学園ドタバタコメディー！！教室には何もない！？机も椅子も！？この学園は少しおかしいんじゃないかな！？楽しんでもらえれば幸いです。

エピローグ

「学園長…これは本気ですか？」

薄暗い部屋の中で二人の女性が何やら話し込んでいる。

「あぁ、もちろん本気だよ。何か問題があるかい？里美先生。」

学園長と呼ばれた女性は椅子に座り、窓の外を見下ろしながら先程の問いに答える。

「いえ……。しかし、これはいくらなんでも……。」

里美と呼ばれた女性の顔には明らかな困惑の色が見える。が、何かを諦めたようにふう…っと溜息をつくと、手に持っていた資料を机の上に置く。

「わかりました。この件はひとまずこれで決定ということにしましょう。それでは失礼します。」

そう告げて、女性は後ろを振り返りスタスタと部屋を出て行ってしまう。

「ふふっ……。これから面白くなりそうじゃないか。」

机の上に乗せられた資料を眺めながら、学園長と呼ばれた女性は怪しげに微笑んでいた。

第一話　佐藤家の朝

「……ゃん」

何やら音が聞こえる。誰かが俺を呼んでいるらしい。しかし眠い……。

「…にいちゃん、起きて。」

再度呼びかけられる。流石に二度も呼びかけられたら起きないわけにはいかない。おもむろに時計のほうに顔を向ける。あれ？まだ６時じゃないか。

「ん～…なんだ、雪じゃないか。珍しい。」

呼びかけてきていたのは妹の雪だった。髪はつやつやの黒で首ぐらいまでの長さで切りそろえている。目がくりくりしていて可愛い。性格は大人しくて少し怖がり。そんなところがまた可愛い！！

「どうしたんだ、そんな可愛い…もとい泣きそうな顔して…。」

つい口が本音を出しかけたが、訂正。

「えっと…あのね…。」

どうにも歯切れが悪い。そんなにマズイことなのだろうか……。しかし困った顔も可愛いな。

「大丈夫だ、お兄ちゃんはちょっとやそっとのことでは驚かないから言ってごらん。」

全く、朝からそんなに慌てて兄のところに来るなんて雪もまだまだ子供だなぁ…。

「お姉ちゃんが……。」

姉？姉さん帰ってきてるのか？？

「……朝ごはん作るって……。」

シュバッ！ダンダンダン！

雪の返答を最後まで聞くことなく、俺はベッドを飛び降り、階段を駆け抜けキッチンへ急ぐ。

くぅぅ！！しまった！迂闊だった…！！よもや姉さんが帰ってきているとは……！しかも朝ごはんだと？どうしてそうなった！たしか今日の当番は夏だったはず…。あいつもしや寝坊したな！！

以前、姉の手料理を食べた俺はその後三日にわたって熱と吐き気に苦しめられた。そのことを本人は知らないが。

バンッ

リビングへのドアを開け、キッチンへ出ると、そこには二人の人間が立っていた。背の低いほうが必死に背の高いほうへ何かを訴えているようだ。

「あっ！ダメだって！真美姉ちゃん！たまねぎは皮むいて…あぁ！違うそれはめんつゆ！醤油はこっちだって！バナナ！？バナナなんて使わないよ！！しまってしまって！！あっ…！に、兄ちゃん！」

一体彼女らは何を……そして胃薬は何錠必要になるか……などと考えていると、小さい方に声をかけられた。

こいつの名前は夏美（俺は夏と呼んでいる）。雪と双子の俺の妹だ。髪は普段はツインテールで、身長は雪とほとんど同じで１４０？あるかないか。性格は明るく、スポーツが大好きな元気娘だ。今は寝起きなのか髪がぐしゃぐしゃだ。

俺は夏にだけ分かるように目線でアイコンタクトを送る。

（お前何やってんだ！？今日の当番はお前のはずだろう！？）

（ち、違うんだ、兄ちゃん！！こ、これには重大で絶大な理由があ

るんだ！！）

アイコンタクトを受け取った妹は同じく目線だけで返事を返してくる。しかし重大で絶大な理由か…。もしかしたら夏にも何か致し方ない理由でもあったのかもしれない。それならば少しは考慮してあげても……。

（寝坊しちゃった☆てへっ）

「死刑。」

「漏れてる！！兄ちゃん！！漏れちゃいけない単語が漏れちゃってるよ！！」

「あん？和樹じゃんか。おはよう。」

夏にどのような罰を与えようか考えていると、諸悪の根源から声をかけられた。

ちなみに『和樹』というのは俺の名前だ。『佐藤　和樹』それが俺のフルネームだ。そして今声をかけてきたのは、俺の姉の『佐藤　真美』だ。

現在大学2回生。髪は金髪でロング。身長は１６５？でスタイルも

いい。整った目鼻立ちは美人の部類に入る。だが中身はそれはそれは恐ろしいヒポポタマスのような性格とゴリラのような怪力がぐぎゃぁあああああ！！

「ふざけてんのか、お前は…。」

姉のアイアンクローが俺のこめかみを襲う。なぜだ！？なぜ考えてることがばれたんだ！？もしやこやつ人の心が……！！

「…兄ちゃん、普通に声に出てたよ。」

くっ！だだ漏れか！

しかし、今はそんなことを気にしている場合ではない。そもそもなぜ姉さんが家にいるんだ。たしか姉さんは大学の近くに下宿してたはずだが…。

「姉さん、なんでここにいるの？」

「ん、あぁちょっと必要なものがあってな、それを取りにきたんだよ。」

姉さんはこのように、たまにふらっと帰ってきては何かを持ってまた出て行くことがある。だから別に今回も驚くようなことではないんだが…。ないはずなんだが…。

「そうなんだ。で、ここで何してるの？」

「見てわかんねえのか？お前らの朝飯作ってやってんだよ。たまには姉らしいこととしてやんないとなと思ってな。感謝しろよ？」

チクショウ！なんてありがた迷惑なやつなんだ！やることなら洗濯やらなんやら他にもあったはずなのに、よりにもよって料理を選択してくるとは！こいつ本当に自分の料理の腕を知ってんのか！？

チラっと夏のほうに視線をやると、冷や汗が尋常じゃないほどに流れている。あぁお前の気持ちはよく分かる…。

いやっ…待てよ。ふいに俺の脳裏に電撃が走る。

もしかしたら姉さんの料理の腕は上達しているのかもしれない。考えてもみろ！以前に姉の手料理を食べたのはいつだ？それは姉が高校3年のときだろう！？それから2年以上経っているじゃないか。しかも姉さんは下宿してるんだ。上達しないわけがない！だが…確証はない。ならば…！

俺はおもむろに近くに置いてあった『白菜』を手に取る。

（兄ちゃん…）

夏が心配そうな目でこちらをのぞいてくる。

（大丈夫だ…。任せろ。）

俺は目だけで夏に返事をし、姉さんの方に向き直る。

「姉さん、これが何か知ってるか？」

そういって白菜を前面に押し出す。

「ん？……んー」

何やら深く考え出す姉。そ、そんなに難しい問題か？？

「あっ、あれだ……キャベツ！キャベツだろ！」

「違う！！」

くそっ、やっぱり変わってないのか…。

「違うのか…、あっ、わかったレタスだ！！」

「「白菜だ（よ）！！」」

思わず夏とはもって答えを言ってしまった。やっぱりダメなのか…？いやこれくらいの間違いならまだ許せる範囲のはずだ。それならば！！

白菜を置いた俺は、冷蔵庫からあるものを取り出す。

（兄ちゃん…）

更に心配そうな声で夏がこちらをのぞいてくる。

（だ、大丈夫だ！！）

そうして、俺は手に持ったものを姉さんに向ける。それは――――タバスコだ。これは間違えようがないはずだ。

「姉さん、これは？」

「次はなんだ…、あー、あ？……ケチャップ？」

「大丈夫じゃなかった！！全然大丈夫じゃなかった！！夏！こいつを早く取り押さえろ！俺達みんな殺される！！」

ケチャップだと！？そんなもんの代わりにタバスコを使われたら、俺らはともかく雪が本当にあの世へ旅立ってしまうかもしれないじゃないか！！こいつは危険すぎる！！

「うがーーッ！なんなんだお前ら！そんなに私に料理をさせたくないのか！？」

「い、いや、そういうわけでは…。」

振りほどかれた俺と夏は互いに顔を見合わせる。
せっかく善意でやってくれようとしている姉さんに面と向かって、お前の料理は殺人級だ、などとは口が裂けても言えない。かといってこのまま放置しようものなら、間違いなく全員あの世行きだ。

こうなったら…アレしかないか。

そう思い夏のほうをみると、どうやら夏も同じ結論に至ったようで、頷き返してくる。

「おにいちゃん……。」

ふと呼ばれて後ろを振り返ると、そこに雪が立っていた。いつの間に降りてきたんだろう？考えに集中しすぎていて気付かなかった。だがこれはなんたる幸運！これでアレが使えるぞ！！

「雪、ちょっとだけ耳かして…。」

「？」

近づいてきた雪に耳打ちする。

「えぇ！い…いいの？？」

「あぁ。」

内容を聞いた雪は少し戸惑っている。だが、仕方ないんだ。命を守

るためにはこれしかない。やってくれ雪。

「じゃあ…。ごめんね、お姉ちゃん…。（すぅ〜〜〜）」

「おっと！」

俺はおもむろに近くにあった小箱から耳栓を取り出し耳につける。チラっと夏のほうに目を向けると…。あっ…すでに付けてやがる。速えな、オイ。

「〜〜〜〜……Ｚｚｚ。」

姉さんが雪に気付き、何か声をかけている。耳栓をしているのでなにも聞こえない。少しすると、姉さんが床に座りだし、そして最終的には横になってしまった。ごめんよ、姉さん。

罪悪感にさいなまれ、つい謝ってしまう。だが、仕方ない。仕方ないんだ！！俺はまだ死にたくないからな！！

「ほら、俺は姉さんをベッドまで連れて行くから、夏は朝飯、雪は洗濯してくれ。」

俺はそういって姉さんを抱える。

「今日はなんだか、朝から疲れたな。」

そう呟きながら俺は自室への階段を上っていった。

第一話　佐藤家の朝（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

真美はなぜ寝たのか、雪は何をしたのか、それは次回明らかになる予定です。

よければ意見、感想のほうお願いします。

それでは次回、お楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6739y/

この学園は少しおかしい！

2011年11月20日18時37分発行